

生文研メール

4号

平成17年11月15日

Ver.1.0.1

生活文化研究所

〒700-8516

岡山市伊福町2-16-9

ノトダム清心女子大学

e-mail

ricch@post.ndsu.ac.jp

目次

日本人と海藻のかかわり(4)	
ヒジキ・モスク利用の歴史と伝統料理	
日本の霊場4 甲斐	今田節子 1
七寛山田楽寺(山梨県東八代郡中道町)	小嶋博巳 2
体験的生活文化史 昭和編 その四	新田義之 4
江戸川乱歩旧蔵版本のこと・西鶴研究こぼれ話4	広嶋進 5
不思議な出会い(その四) ドン ブラウン	横山學 6
編集後記	

日本人と海藻のかかわり(4)

ヒジキ・モスク利用の歴史と伝統料理

今田節子

ワカメとならび使用頻度が高い海藻にヒジキとモスクがある。これらの海藻利用の歴史も長く

単なる日常的な食材としてだけでなく、救荒食・健康食としても我々の生活と深いかかわりを持ち、海藻の食文化の一端を築いてきた。

(1) ヒジキ 正税や供養料としての利用はみられず、多くは救荒食、日常食としての利用であった。例えば、江戸時代の本草書には「晒乾してよくなれたるをつきくたき 米粒のごとくなして米とおなしく飯にかしきて飢荒をすくつ、貧家は常の食に用ふ」と記載されている。ヒジキ飯を凶作や不漁の際の主食として食べ、貧家ではヒジキを米に混ぜることが日常的に行われていたと推測される。また、第二次大戦前後の救荒食としてもよく利用されていたと聞く。

ヒジキは初春から初夏にかけて採取されるが、生ヒジキは洗みがあがり、生を使うことはほとんどない。また、生ヒジキをそのまま乾燥したものはなかなか柔らかく煮えず、黒いあくがでて使いにくい。そのため水洗いしたヒジキを大きな鉄釜に入れて三〜四時間程度ゆで、冷えるまで一夜蒸らし、翌日、柔らかくなったヒジキを十分天日乾燥して保存する。茹で汁に酢を少量入れるとヒジキ

の軟化が早い。家庭用の場合は食酢の代わりに山畑や庭先で栽培しているミカンやダイダイなどの柑橘類の輪切りを入れたり、梅干しをよく使ったといわれる。また、鉄鍋で茹でると黒く色よく仕上がるといわれ、鉄鍋がない場合は鉄釘を入れて茹でることもあった。これはヒジキの色素が鉄イオンと結合して変色を防ぎ、真っ黒く仕上がるものと思われる。なぜか梅雨を越したものが、また、一、二年たったものの方が柔らかく煮えるといわれ、それを見越して多めに保存し、前年のものから使う習慣があった。これらは全て経験的に工夫された合理的な加工法である。

ヒジキは日常食としての利用が多く、非日常食としては盆、法事、葬式などの仏事の精進料理として使われることが多い。ヒジキの煮物、ヒジキの白和え、ヒジキ飯などが中心で、大豆や大豆製品、野菜類と組み合わせることでたんぱく質やうま味を補い、よりおいしく、栄養のあるヒジキ料理に仕上がった。また、ほとんど味のないヒジキをおいしく食べるため、油で炒めて煮るという工夫がみられる。油のこくとほのかなうま味を生かしたもので、油によって高温が得られるためヒジキがやわらかく煮えやすいという利点もあった。

(2) モスク 平安初期の『倭名類聚抄』に「水雲 倭名 毛豆久」とあり、モスクと呼ばれていたことがわかる。モスクは比較的波の静かな内湾のホンダワラの上に自生し、水中にふわふわ漂

つたように見えるために、水雲という漢字が当てられたのだらう。しかし、モズクの形態や食べ方などが明らかになるのは江戸時代で、『本朝食鑑』などには、「乱糸のよつで互いに絡み合い、青黒色をしており、毒はなく柔らかで滑らかである」と性質が説明されている。食べ方については生食、酢や生姜酢に和える、味噌汁とあり、今日のモズクの食べ方と同じである。

モズクは乾燥保存が不可能で、いずれの地域でも塩漬にして保存されていた。塩加減はモズクと塩を同量、モズク一斗に対して塩一升、モズク一升に塩五、六合などさまざまであるが高濃度の塩で漬け込まれている。この塩蔵法によって腐敗が防止されるだけでなく、味や香り、色もほとんど変化することなく保存できる。野菜の漬け物であれば脱水されすぎて歯切れが悪くなる塩加減である。しかし、モズクには塩が浸透しにくく、水で塩を十分洗い流せばもとの滑らかさになるという利点がある。塩漬は、この性質を上手に生かした保存法で、現在でもこの方法によっている。

モズクには本モズクと岩モズクがある。本モズクはホンダワラの上に着生し、細くてツルツルとした滑らかさがあり、岩モズクより上質なものとして扱われてきた。これに対し、岩モズクは海底の岩や石に自生し、太くてシャリシャリとした歯ごたえがある。どちらも水でよく塩を洗い流して塩抜きをし、酢の物として食べられるのが普通で

あった。日常食として食べられたが、冷たく喉ごしがよいために夏の客料理としても使われることが多かった。変わったモズク料理としては近畿地方に「たけのこモズク漬け」がみられ、塩漬けのモズクを漬床にして茹で筍を漬けたもので、筍は塩抜きして煮物にされた。また、「モズクの味噌汁」や「モズク粥」を作ることもあり、熱い味噌汁や粥の中でドロツとモズクが溶けかけ、喉越しもよく、体が温まるといわれた。

このようにヒジキとモズクの食文化は、コンブやワカメに比較し、より庶民的で日常的な係わりのなかで伝承されてきたといっても過言ではなからう。現在ではヒジキの煮物や和え物、モズクの酢の物などがスパーの総菜コーナーには年中ならんでいる。また、漁業組合婦人部の活動としてモズクの佃煮などの新しい利用法が開発されている。ヒジキやモズクは食物繊維やミネラルが豊富であるばかりでなく、有効な生理活性物質を含む健康食としてその価値が見直されているからであろう。

〔主な参考文献〕

(1) 『復刻日本古典全集』延喜式、正宗敦夫編 現代思潮社、一九七八。(2) 『古事類苑』植物部普及版、吉川弘文館、一九八五。(3) 『食物本草大成』庖厨備用倭名本草、吉井始子編、臨川書店、一九八〇。(4) 『諸本集成倭名類聚抄』本文編、京都大学文学部国語学国文学研究室編 臨川書店、一九七七。(5) 『本朝食鑑』一巻、

人見必大著・島田勇雄訳注 平凡社 一九七六
(6) 今田節子著『海藻の食文化』、成山堂書店 二〇〇三。(7) 山田信男著『海藻利用の科学』、成山堂 二〇〇〇。

日本の霊場4 甲斐

七覚山円楽寺(山梨県東八代郡中道町)

小嶋博巳

山はかりなのに山ナシ県、と言っては怒られるであろうが、甲斐は山国である。国名は山峽、つまり山と山のあいだの狭いところの意だといふ一宮の浅間神社(一宮町)や北口本宮富士浅間神社(富士吉田市)などの富士を祀る諸社をはじめ、当然のことながら、この国の霊場には山岳信仰の影が濃い。知名度と参詣者数では随一の日蓮宗総本山・身延山久遠寺にしても、その奥にある七面山の信仰と無関係ではない。

七覚山円楽寺は、一般にはあまりなじみのない寺であろう。少なくとも現在は、遠近から多数の参詣者が訪れるという意味の霊場寺院ではない。

私が訪れた際、最寄りのJR身延線・市川大門駅から乗ったタクシーの運転手ですら、その名をはじめで聞いた様子であった。たまたまいも実にひっそりと、簡素とも言える姿を見せている。それにもかかわらず、今回この寺を取り上げるのは、中世から近世にかけて、ここが六十六部(日本廻国)の巡礼者たちが甲斐国においてまずめざす聖

地だったからである。

六十六部という巡礼は、日本全国を巡り歩きわめて規模の大きな巡礼である一方で、その巡礼地が一義的には固定していなかったという際立った特徴をもつ。このことは、巡礼とはなにか、さらに宗教的遍歴とはなにかを考えようとするとききわめて示唆的である。ただ、巡礼地の選択はまったく巡礼者の随意で何の目安も示されていないかったのかというところ、かならずしもそうではなく、抛りどころとなる情報もないわけではなかった。とくに近世中後期には、この巡礼にまつわる奇妙な話を語る縁起とともに、国ごとに一ないし三か所の巡礼地を示す納経所一覽(巡礼地リスト)が何種も出版されていた。そうした一覽に甲斐国の納経所としてかならず登場するのが、七竈山田楽寺なのである。

田楽寺は、東八代郡中道町右左口に所在する新義真言宗(真言宗智山派)の寺院である。右左口は甲府盆地と富士山麓とを隔てる御坂山地の北側に位置し、この山地を越えて甲斐と駿河を結ぶ中道往還の宿であった。峠を少し登れば背後に甲府盆地が一望され、南へと峠を越えれば道はやがて富士五湖の一つ精進湖のほとりに出、さらに富士を左手に見ながら駿河湾に向かって南下してゆくことになる。

寺伝によれば、呪術をもって人を惑わしたとして伊豆に流された役小角(役行者)が、富士

登拝の基点としてここを開いたのだという。境内から道と小川を隔てた西南の山腹に鎮座する五社神社の背後に、かつては行者堂があり、かなり古い作例に属す役行者像(延慶二年(三〇九)の修復銘をもつ)を祀っていた。行者堂は一九五九年の伊勢湾台風で倒壊し、行者像はいまは本堂に移されている。五社神社自体も、現在は右左口地区の村氏神であるが、明治の神仏分離以前は田楽寺と一体の五社権現であった。「五社」は熊野・白山・金峰・伊豆・箱根であるという。むしろこちらが本来の聖地、田楽寺はここを管理する別当と考えらるべきであろう。熊野をはじめとする霊山の神々を祀り、修験の祖・役小角を開山とすることから明らかなように、この七竈山もまた、山岳信仰・修験道の聖地であった。文化年間成立の『甲斐国志』には、諸堂社のほかに三つの塔頭、三十二坊、十二の末寺などの存在が記され、相應の朱印地もあつたとあるから、広義の富士信仰圏の一角を占める、甲斐の修験道のセンターの一つと考えてよいのである。今日のように少々寂しい姿になってしまったのは、例によって明治の神仏分離と、その後の火災(一八七八年)が大きく災いしている。

六十六部の巡礼者が参り、経典を奉納したのは行者堂に北接する、これも伊勢湾台風で倒壊した六角堂であった。興味深いことに、ここには頼朝の伝説が定着していたらしい。『甲斐国志』は、

六角堂内に廻国者(六十六部巡礼者)が元祖とするところの頼朝坊の石塔婆があると記し、続けて「頼朝の事稗説あり今略して不記」としている。稗説は民間の俗説というほどの意味であろう。廻国納経を實踐した頼朝坊という聖が転生して將軍頼朝となったという物語。六十六部縁起の説く物語をさすのだと思われる。ほぼ同時期にここに参った日向の修験者・野田泉光院は、田楽寺に「頼朝の笈」があると旅日記に記しているが、これも頼朝の前世の(つまり頼朝坊の)笈と称するものがあつたとの意であろう。

六角堂にはまた、巡礼者が経典を奉納するための鉄塔が設けられていたらしい。享保年間のこの寺の納経請取に、「聖武皇帝如法經六十六部之納経鉄塔之旧岨」と見える。この連載が石見国まで行き着けたなら、そこで詳しく触れたいと思っているが、各国の霊場には六十六部の巡礼者が経を納めるための鉄塔を設置していたところがあつた。完全な形で現存する石見の大田南八幡宮(島根県大田市)の事例のほか、残欠や絵画資料がいくつか遺る。巡礼者たちは経典を入れた銅製経筒をそこに納入(あるいは投入)したと考えられており、その様はかつての田筒型郵便ポストを想像してもらえばよいであろう。鉄塔の建造年代は十四世紀であることを示す資料が多い。七竈山の場合、厳密に言えば鉄塔の所在地を示す資料を欠くが、大田南八幡宮でも鉄塔は六角堂内に安置されていた

から、ここでも同様であったと推測される。大田南八幡宮にはまた、鉄塔は頼朝の寄進になるとの伝があり、七覚山の例を思い合わせれば、納経鉄塔と頼朝前世の廻国の物語とを結びつける考え方があったかと思われる。

七覚山が六十六部廻国巡礼における甲斐の代表的巡礼地（納経所）とされるに至った経緯は、この国における山岳信仰 修験道の中核であったという一般論的な事実以上のことを、いまは指摘することができない。しかし、納経鉄塔と頼朝坊伝説の存在は、そうした一般論以上に、ここが六十六部の世界に深くコミットしていた可能性を示唆するものである。

行者堂・六角堂の跡地は、五社神社の背後の斜面を、藪ごぎに近いことをして登ってゆかなければならない場所にある。礎石らしい石と、取り残された手水鉢が、かつて堂舎があったことをかろうじて教えてくれる。

体験的生活文化史 昭和編 その四

新田義之

アメリカと戦って徹底的に敗れた後に、日本の社会に新しく持ち込まれたり、また新に芽吹いたりしたものは多かった。この傾向は都会ばかりでなく、むしろ爆撃による被害などが少なかった農村に住む人々に、いちじるしい影響を与えたように思う。これまで軍隊の下士官のように怖かった

先生たちが、突然に民主的で優しい年上の友人に变身したり、村の役場や農業協同組合に務める若い男女が、仕事がひけてから小学校の運動場に繰り出してバレーボールを楽しむなど、若い世代の意識の変化が生活スタイルに反映するようになったのであろう。

多分私が新制中学校の一年になった秋だと記憶するが、昼前の授業中に、突然校長先生から呼び出された。用件は、この日の午後に関われる村落対抗のバレーボール大会に、笠谷村チームの選手として出場するように、村役場から要請があったのだという。私は当時学校のバレーチームの前衛センターで、下校の途中で大人たちの練習に加わって遊ぶことがよくあったので、突然の欠員補給のためだったのだろう。そこで急いで用意をして駆けつけ、農協から借りたトラックの荷台にチームメンバーと一緒に乗り込んで、この地域の中心の町で催されたトーナメントに参加したのだ。こつした石坂洋次郎作「青い山脈」のような生活様式が農村を活気づけていた反面、いつの間にか姿を消して行ったものも少なくなかった。幼いころから夏になると必ず行なわれた「土用干し」も、いつとはなく我が家から消えていた。夏の盛りは何日もかけて家中の畳を庭に干し、竹棒でよく叩いて一年のほこりを払うのもその内であったが、特に楽しかったのは「曝書」、すなわち和綴じ本の虫干しである。

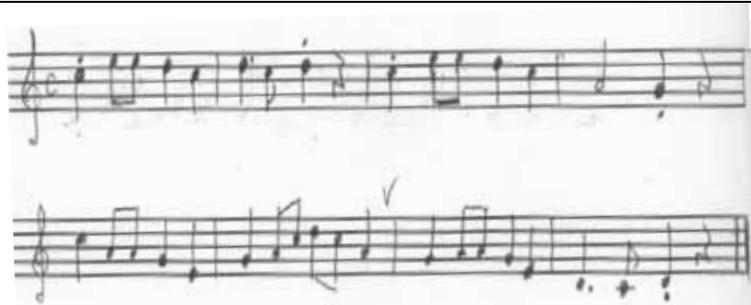
家の土蔵には、木箱に収めた沢山の和書があった。これを土用の内に一冊々々開いて、筵の上に並べ、日光に曝すのである。日本紙は日光に当てても変色せず、傷みもしないので、こつして紙魚（シミ、紙を食べる虫）を退治する。幼いころにはもちろん、どの本を見ても何が書いてあるのか見当もつかなかったが、少し成長すると僅かずつでも内容が推測され、開いて干す仕事よりも拾い読みする時間の方が多くなったものである。

いまでも鮮やかに思い出すのは人相学の本と、占いの本である。これらは仮名書きで絵入りだったので、子どもにも分かりやすかったからであろう。しかし主流は漢文のもので、「大明律令」などという題名も覚えていた。後に高校で「大宝律令」のことを教わった時、家に似た名の本があったことを思いだし、「大宝律・大唐律・大明律」と連想がつながり、何か納得した気がしたものだ。

徳川時代は地方の知識階級の読書力が高く、蔵書も趣味の一つであったのだろう。また農村の経済を管理する役職柄、その方面の文書が沢山保存されていて、加賀藩の経済史の研究をする上で極めて貴重な資料だということ、金沢大学の教授がたびたび調査に来た。父がその教授の相手をして色々説明しているのをそばで見ながら、虫に食われた古い紙切れが、読み手の力次第で高い史料価値を顕わすことを、子どもながらに感嘆したも

のである。その後、これらの資料はまとめて金沢大学図書館に保管されたと聞いていたが、恐らくはそれらに、まだ残っていた別の家蔵文書史料を加えてであろう、後に改めて、当主である兄から石川県郷土歴史博物館に寄託されたと聞いた。現在は同博物館から「新田家文書目録」も刊行されており、最近これらを使った優れた研究も発表されているのを見ると、資料の移管を受け入れた父と兄の見識に、しみじみと敬意を表せざるを得ない。地方に残されたこの種の記録が散逸寸前にあるので、学術的吟味の上で系統的に保護することが緊急の必要なのは、言うまでもないであろう。都会に職を得てからは、故郷で行なわれる村祭りを見る機会が無くなってしまったが、秋祭りの際の獅子舞も懐かしい。屈強な大人一人であろうや、振り回せるほどの獅子頭に、二十人ばかりの若者たちを内に隠した大きな布の胴体がつながら、いわゆる「お獅子」が、村の神社で奉納舞をしたのちに、笛と太鼓で囃し立てながら村落を練り歩き、一軒一軒の戸前で獅子と舞い手との闘いを演じて見せるのである。

私の家は全長百メートルばかりの細い坂道を登った上にある一軒家だが、獅子舞の一行はその坂を村人の群れと共に登ってきてくれた。そして屋敷の前庭で、賑やかに囃したてながら、一通り獅子舞の演技を披露するのが習わしだった。それは大口をばくばくさせて威喝する獅子頭に、木製の



なぎなたを華麗に操る勇士がいとむ闘いで、村の男なら誰もが身につけている技であり、多少の上手下手はあるにしても、見事なものだった。囃しの太鼓は言つに及ばず、笛も皆上手に吹いた。農村の行事はどれも古来の生活の面影を残していて、今では意味不明になった囃子詞にも、昔の村落共同体にとって忘れがたい記憶が留められている。獅子舞の囃し歌は次のようなものだった。

「おっぴきたいさん、
ノーエ、しーしがやま
から、ノーエ、しーし
がさいさい、やーまあ
かあら、おっぴきたい
さん、ノーエ、
……」

民俗学的な興味をお持ちのむきは、どうぞこの歌詞の意味を解析してみてください。
実はこの囃しの旋律も覚えていたので、現代式の楽譜に表しておくと、お国の村祭りの囃しと比べて、楽しんでいただけたら幸いである。

江戸川乱歩旧蔵版本のこと 西鶴研究こぼれ話4

広嶋 進

井原西鶴などの浮世草子の書誌調査のために『国書総目録』を繙いていると、しばしば「江戸川乱歩」所蔵という記述に出会う。江戸川乱歩とは、『怪人二十面相』など数々のミステリー小説を執筆した、あの江戸川乱歩のことである（一八九四―一九六五）。

乱歩は実は、近世版本などの古書の収集家としても著名であった。東京都豊島区の乱歩邸には土蔵があり、二階建ての蔵には約二万五千冊の和洋の書籍や雑誌が所蔵されている。

乱歩は土蔵の中の書物を次のように説明している。

私の家には昔風の二階建ての土蔵があつて、その階下の全部と二階の三分の一が、天井までの書タナになっている。種類分けをすると、国文関係が一番多い。その半分が徳川時代の和本で、全体の書タナの約五分の一を占めている。仮名草子、浮世草子、八文字屋本などが主で、西鶴の小説のめぼしいものはほとんどそろっている。（私の本棚「昭和29年」）

本年六月に立教大学で日本近世文学学会が開催されたが、その開催に合わせて、立教大学が譲り受けた乱歩旧蔵の近世文学の版本約一 点が展示された。西鶴の代表作では『好色一代男』『西鶴

諸国はなし』『好色五人女』『好色一代女』『日本永代蔵』『世間胸算用』『万の文反古』など、刷りも保存も良い、美しい版本ばかりが並べて展覧しており、まことに壮観であった。

乱歩の収書方針の一つに、内外の探偵小説を集めるということがあった。乱歩は言う。

徳川時代の裁判物語類の原本、明治以後現在までの日本人の著書、西洋の探偵小説、その翻訳書、内外の探偵雑誌などは、できるだけ集めて探偵小説図書館を作りたいほどに思っている。今まで集めただけでも、おそらく日本では私の蔵書が一番多いだろうと思う。

〔集書〕昭和31年)

「私の蔵書が一番多い」と言うほど、彼は探偵小説の収集に自信を持っていた。その成果は例えば「類別トリック集成」(昭和28年)などの評論に結実した。右は英米の探偵小説の作例八二二のトリックの分類の試みであり、その博覧強記ぶりに圧倒される。

西鶴に『本朝校陰比事』という作品がある。これは裁判に関する四十四話の短編集であり、日本の推理小説の先駆けとされている。この『校陰比事』など、西鶴の推理小説的色彩の作品ばかりを集めて、私を含む数名のメンバーで『西鶴が語る江戸のミステリー』という、アンソロジーを作った数年前に出版した(ペリかん社)。いざ発刊してみると、意外にも好評で、続編の出版が先頃決

定した。

光文社文庫から解題・注釈書付きの乱歩の全集三十巻が現在刊行中だが、昨今は推理、ミステリー、伝奇が流行する時勢のようである。

乱歩はなぜ「西鶴の小説のめぼしいもの」を集書しようと思いついたのだろうか。その目的と動機を明確に記した文章を見つけないことはできなかったが、次のような記述に出会った。

田山花袋の「蒲団」にはじまる自然主義というものが、どうも私の性に合わなかった。今でもそうだが、私は少年時代から愛欲告白文学というものを好まなかったのである。

(略)白樺派もやはり愛欲告白体なので私の性に合わなかった。そう云えば宇野浩二も告白体だが、私は初期の作品にこもる異常性に惹かれたのである。(略)近松は例の私の愛欲文学嫌いのためか、まだ多くを読んでいないけれど、西鶴(これは愛欲文学でも異常である)と芭蕉には心酔した。(私の読書遍歴)昭和27年)

乱歩は、西鶴作品の持つ「異常性」に心ひかれたという。右の「異常性」とは「非日常性」「伝奇性」の意味で使われている言葉のようである。自然主義以来の多くの日本の小説家は、乱歩のいう「愛欲告白文学」としての西鶴作品に着目し、賞賛してきた。その意味で乱歩の西鶴に対する「心酔」の仕方は、少数派である。乱歩が西鶴に具体

的に何を見出していたのか、興味深いものがある。

不思議な出会い(その四)ドン・ブラウン

横山 學

先日、一年ぶりに横浜開港資料館を訪ね、「ドン・ブラウンと戦後の日本」展を見てきました。資料館は、神奈川県庁の前、「横浜海岸教会」の北隣に位置しています。敷地内には大きな楠と新旧二棟の建物があります。ペリー提督と幕府との間で日米和親条約(安政元年・一八五四)が結ばれたのは、この「玉楠の木」(親木は震災で焼失)の下でした。古い方の建物は、関東大震災後の昭和六年(一九三一)に再建されたものですが、以前は英国総領事館として使用されていました。幅の広い分厚い玄関扉、狭くて急な階段、「英国建築」そのままの形状を残して、現在は「開港資料館」の事務棟として使用されています。新しい建物には展示館・図書室・収蔵庫が備えられています。年に四回開催される企画展示は横浜・開港・海外についてのもので、いずれも興味深く目が離せません。

ドン・ブラウン(Don Brown・1905~1980)は米国クリーブランドの生まれで、昭和五年一月に『ジャパン・アドバタイザー』の特派員となるために二十五歳で来日し、日米開戦の前年まで、『クリスチャン・サイエンス・モニター』『インターナショナル・ニュース・サービス』『ニューヨ

ーク・タイムズ』、『シカゴ・デイリー・ニューズ』の記者も兼ねました。戦後は、昭和二十年十一月にGHQ民間情報局の一員として再び来日しました。その後、昭和三十二年までアメリカ極東軍に属し、戦後日本の民主化に大きく関わりました。集書家でもあり、一万点を超える蔵書を残しました。戦前の滞日時期から「日本アジア協会」に属し、昭和五十五年五月十七日に名古屋で亡くなるまで、理事・紀要の編集長・出版委員長を務めて、その活動を支えました。ドン・ブラウンが亡くなり、蔵書と「個人資料」を横浜開港資料館が譲り受けたのが翌年で、まず蔵書の整理から始められました。その成果は、『ドン・ブラウン・コレクション書籍目録』として資料館から出版されています。

蔵書の整理が終わった頃、ブラウンの「個人資料」を整理・分類して欲しいという話がありました。わたくしがフランク・ホーレー (Frank Hooley, 1909~1961) の遺した「個人資料」を長年整理し続けていることや、そのホーレーの経歴がブラウンと重なるところがあることから、書類整理の「手法」を借りたいという依頼でした。三〜四年間でしようか、十二月に一週間ずつ滞在し、作業をしました。ドン・ブラウンの書齋に遺されたものが、二十個以上の大型ダンボール箱に雑然と詰め込まれていました。どの箱に何が入っているか見当もつきません。ひとつひとつ、埃を払い

ながら開いてゆき、パソコンのデータとして入力しながら、中性紙で作った封筒に書ききを入れてゆきます。大変な作業ですが、調査をするものにとっては最高に幸せな時間でもあります。様々な形式のものが、予測もつかない取り合わせで出てきます。書簡や新聞の切り抜き帳、青年期の作文や学校成績簿、大学時代の写真アルバム、カタログ、園遊会の招待状。ブラウンの、生きた世界が次々と蘇り、モザイクのように組み合わさってゆきます。ガリ版摺りのGHQからの書簡や配布文書は、黄ばんで文字も薄れていますが、内容は想像がつかめます。戦後ロンドン・タイムズの特派員をしていたホーレーの遺した物にも、含まれていたからです。十五年前にホーレーの整理をしていたときと同じで、不思議な懐かしい思いがしました。ヘネディクト (Henriette) がOWI (戦時情報局) に提出した報告書「日本人の行動型」を見つければ、それが彼女の著書『菊と刀』の原型の一部であることを知った時は、学生に戻ったような素直な感激を覚えました。OWI時代に携わったと思われる数十枚の「宣伝ビラ」は彩色で見た目にも綺麗でした。夕方に資料の整理に区切りをつけ、担当者の中武香奈美さんとお茶を飲みながら、その日の成果を報告するのが、また楽しいひと時でした。資料を手にして頭に浮かんだこと、ホーレーとの関連で思いついたことを話すと、それに応えて、彼女の持っている情報を教えてく

れます。「ああ、そういう訳が」「こういう理由で寄せられた書簡に違いない」など、新発見の喜びに会話が弾みました。

評価の定まったドン・ブラウンの旧蔵書購入に伴って、いわば「お供」の様な形でもたらされた「個人資料」は、形の見えない宝箱でした。周りの包みを解き、薄紙を剥がしてゆくと、中から情報の一っぱい詰まった「宝石」が顔を覗かせます。色々な角度から光を当ててゆくと、思いがけない色に輝くのです。「どんな形や順番で」、「どの資料と重なり合って」、「どの頁が捲れていたか」、「個人資料」は、保存の様子もまた重要な手がかりを含んでいます。

これから始まる長い作業に緊張して、最初のダンボール箱の封を開けたとき、一番上に載っていたのが一枚の報道写真でした。手にした瞬間、ホーレーの姿を見つけました。特徴のある横顔、下を向いてメモを取っています。右手は鉛筆を立てるように握って構えています。その鉛筆が白く光っていて、「あっ、あれだ。」と思いました。ホーレーの遺した書類に挟まっていた鉛筆と同じものです。英国カンバーランド社製で、白木のため擦れて汚れていますが、微かに「VVO Dry」と読める戦時支給品でした。写真の中央にガスコイン駐日英国大使、テンプルを挟んで左右にドン・ブラウンとフランク・ホーレーが座しています。写真の裏面には、撮影情報とGHQの提供であるこ

とがスタンブされています。昭和二十三年十月十三日、英国大使館において、日本アジア協会とアメリカ社会文化科学使節団の共催で、社会科学討論会が開催されました。そのときの会議風景でした。

フランク・ホーレーは一九〇六年生まれですから、ブラウンとはほぼ同じ歳です。同じ時期、同じ歳で来日し、ともに開戦前を日本で過ごし、終戦後直ぐに再来日をしています。ホーレーの手元にブラウンからの書簡が残っていませんでしたが、ブラウンの消息を伝えている友人からの書簡は数通あります。そして、ホーレーの著書『Mesopotamia Japonica』の送付リストに、ブラウンの名が載っていますから、友人関係であったことがわかります。

ドン・ブラウンとこの資料館との仲立ちをしたのが、日本関係の蔵書家であるブルーム (P.C.Bloom, 1898-1987) で、彼の蔵書も横浜開港資料館に譲られ、『ブルーム・コレクション書籍目録』(四冊) が出来ています。ブラウンの目録同様、日本に深く関わり、蔵書家(愛書家)であったひとの、索引を備えた蔵書目録です。当時の日本に関する出版物の書誌情報が詰まっています。著者からの寄贈本も多数あり、記された献辞は当時の人間関係を物語ってくれます。こういふことが個人文庫の魅力なのです。「書物の仲間」であるブルームは、しばしばホーレー邸を訪れ、

ホーレーは温かく迎えました。食事の際には「メロン・アレルギー」のブルームを大変気遣っていたと、ホーレーの家族から聞いています。

わたくしが学部時代に親しく教えを乞った歴史学者の洞富雄は、フランク・ホーレーと同じ年に生まれました。戦後に数回、ホーレーと会う機会もありました。当時、潔癖症であった洞先生は、いつもアルコール棉で手を拭いていたので、手がカサカサに荒れていました。初対面でホーレーと握手したとき、ホーレーの大きな掌がとても柔らかく、自分の手を恥すかしく思ったそうです。敗戦、戦勝国と敗戦国、占領下。複雑な惨めさを感じたと、その時のことを語ってくださいました。ホーレーと同じ時代を生きていらした洞先生とお会いして、お歳を召されてゆくお姿を目にするたびに、ホーレーが存命であればどのようになっていたろうかと想像したりしました。ブラウンにも「共通する時間の流れ」を感じるので。記録によれば、昭和二十三年二月五日、英国総領事館であった開港資料館の建物を、フランク・ホーレーが訪れています。戦前に結婚した妻俊子との離婚手続きのためです。そして一カ月後に、カナダ人のグイネス・タンブルと再婚しました。

整理を済ませたドン・ブラウンの「個人資料」は、「横浜国際関係史研究会」(北河賢三代表)に研究が委託されたそうです。十一名の会員が専門的な角度から分析を重ねています。その成果の一

部は、『ドン・ブラウンと戦後の日本』(有隣堂刊)にまとめられました。今回の展示を観ながらそれぞれの資料を開いたときの状態を鮮明に思い出しました。その状況を研究会の人たちに伝える機会を持つことが出来なくて、とても残念に思っています。(平成十七年十一月八日稿)

編集後記

この「メール」の編集を終えつつある今、キャンパスは学園祭で賑わっている。軽音楽が響き渡り、学生たちの上気した会話が飛び交っている。心も場所も留まっていけない彼女たちの耳や目に、研究の楽しさや興味を伝えるのはなかなか難しい。我々の昔を思い起こせば、納得が行く。『生活文化研究所年報』の既刊目次(十八輯まで)と『生文研メール』(本文)が、(Web http://www.ndsu.ac.jp/1000_gui/1700_jnst/1730_a02/1730_a02_or01.htm)で公開されています。ぜひご覧下さい。興味があれば、お知らせください。また、ご質問やご助言などお寄せ頂ければ幸いに存じます。(Y)